

県外派遣審判員報告書

報告者 原田 拓朗

大会名 全九州高等学校バスケットボール競技大会

期日 令和元年6月22日～23日

会場 沖縄県立武道館

1 審判会議

- 代表者会議での確認事項
- 講義「ベーシックなメカ、シンプルなプレーコーリング、処置ミスゼロにするために」
松本 究 氏
IOT, 3POメカニクス, ガイドライン, ルールの変更点, ゲーム中のチェックポイント, どのような場面でクルーワークを発揮するのか, ゲームコントロールをする上で押さえておくべきポイントなどについて具体例を示しながら説明があった。

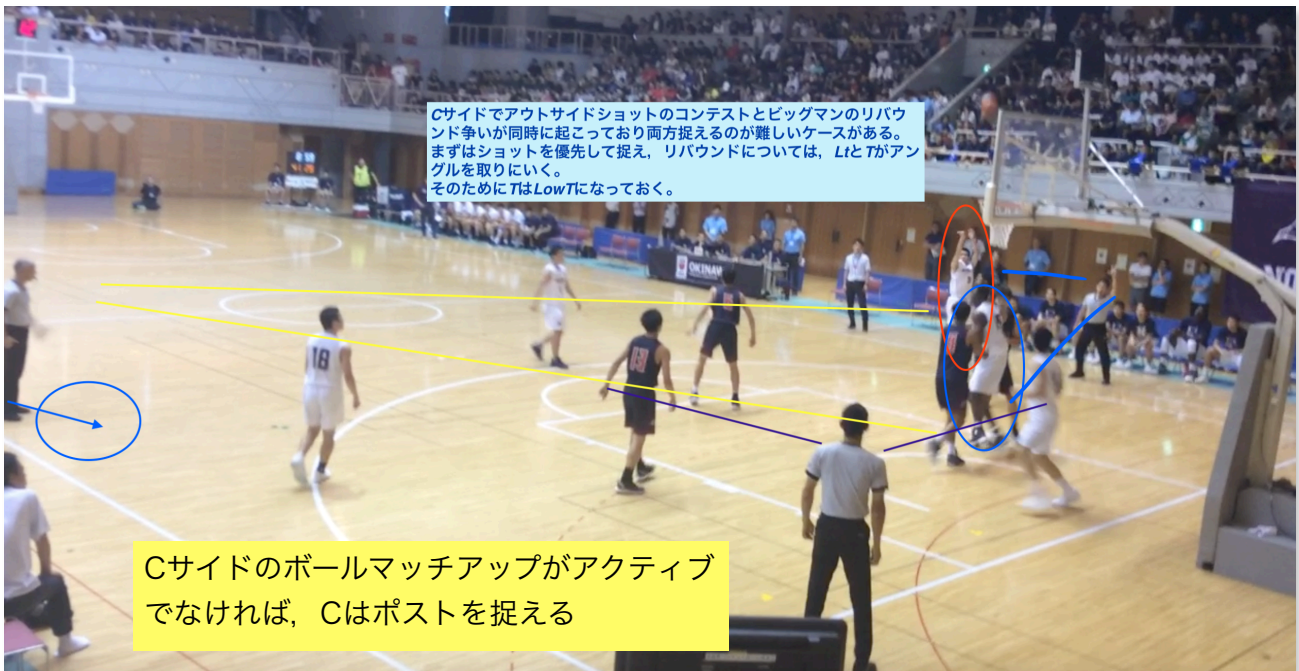
2 担当試合1 22日(土)

- Aコート5試合目 福岡第一(福岡県1位) 対 長崎西(長崎県1位)
- 担当審判員 CC:原田拓朗 U1:川井剛 U2:潮平朝一郎
- PGCの内容
 - ・メカニクス, ガイドラインの確認
 - ・県大会の映像を使ったスカウティング
- ゲーム後のMTG(IR無しクルーMTG)
 - ・判定した場面のプライマリの確認
 - ・GTの確認
 - ・判定できた/できなかった場面のポジショニングの確認主に上記の内容について, 映像を活用してMTGを行なった。

3 担当試合2 23日(日)

- Bコート第2試合 延岡学園(宮崎県1位) 対 福大大濠(福岡県2位)
- 担当審判員 CC:御手洗亮 U1:原田拓朗 U2:比嘉涼太
- PGCの内容
 - ・メカニクスの確認, ガイドラインの確認
 - ・処置ミスを防ぐためのコミュニケーションの場面の確認
- ゲーム後のMTG(IR 上田篤拓氏)
 - ・ゲームを振り返ってクルーで気になった点の確認
 - ゲーム序盤の両チームのセンタープレーヤーのポジション争いをテンポセットすべき
 - 3Qの始めの外国人選手のインテンシティが上がったところへの対応
 - ・クルーでのショットとリバウンドのカバーの考え方についてのアドバイス
 - CサイドでCがアウトサイドショットのプレイをしっかりと見なければならないが, 同じサイドのリバウンドも見なければならない場面について説明があった。

※今後このような方法に変化していく



- ・ HCとのコミュニケーションについて
→ 「コーチ、ファウルに見えましたね」というアプローチもあっていい。

4 インテグリティについて再確認（ブロック連携会議）

- ・ 「クリーンバスケット」の考え方の根本を理解する必要がある。
→ バスケットボールの価値を高める。
- ・ 人と人との関わりを大事にし、プレーヤー、コーチ、審判が協力してゲームを作っていく雰囲気作り。一般の人たちが観ていて見苦しくないゲームにしていく。
- ・ 審判は取り締まりをするわけではなく、起きた事実をガイドラインに沿って記録する。
- ・ TFを記録することは、コーチの人格を否定しているのではない。
→ JBAが指導者委員会でも説明済み
- ・ ガイドラインに書いてある行為が起きたら、TFが記録されるリスクがある。

第1回インテグリティ委員会開催（2019年1月28日）

JBAとしての喫緊課題「暴力暴言根絶」に向けての対応

① メッセージの発信

**クリーンバスケット、クリーン・ザ・ゲーム
～暴力暴言根絶～**

○ 主題（JBA、トップリーグ・団体共通） 「クリーンバスケット、クリーンザゲーム」
クリーンバスケット・・・バスケットファミリー全員の協力によりバスケットの価値を高める
→ **オフコートでのあり方**

クリーンザゲーム・・・試合に関わる選手、コーチ、審判全ての協力で試合の価値を高める→ **オンコートでのあり方**

○ 副題（各団体で設定） JBAは「暴力暴言根絶」

5 全体を通して

「ベーシックなメカ、シンプルなプレーコーリング、処置ミスゼロに」というテーマの奥深さと大切さを感じる大会でした。どのゲームでもどの大会でも言えることですが、日々の実践にどれだけこのテーマをこだわって、当たり前取り組みとしてできているかが求められていると感じます。特別なことをするのではなく、上記のことを徹底する。

ゲーム前の打ち合わせから、オンザコート、ゲーム後の振り返りについてもメカニクスやガイドラインを基に確認していくことで積み上げられていくと思えました。現場で判定に悩む場面を映像で見返したときに、何が欠けていたのかを分析することで次に繋がっていくことを感じました。今回の大会で判断に迷ったのは、外国人選手と日本人選手のマッチアップです。大会前に映像を入手してスカウティングをし、PGCで確認をしても判定ができなかった場面がありました。そのプレーヤー同士のマッチアップがポイントになることを理解しつつも、判定に繋がられませんでした。レフェリーディフェンスの意識が弱くなる時があることに気付きました。課題の解決に向けて、仕掛けはOFとDFどちらが先かを確認しつつ、その触れ合いがイリーガルかどうかの判断の精度を上げていくことを訓練していきます。

一ヶ月後には鹿児島県でインターハイが開催されます。まずは大会が無事に始まり、無事に終わることができるよう開催県の一員として担っている業務の準備をしっかりと行っていくことは当然ですが、コートに立つにあたって審判のレベルアップを図って臨みます。上田アシスタント・マネージャーから指導いただいたゲームコントロールの押さえどころの考え方やCサイドがアクティブなマッチアップがシュートとポストにある際のT、Lの協力の仕方など、取り入れて次のゲームに生かしてまいります。

インテグリティについて、宇田川ダイレクター、上田アシスタント・マネージャー、各県の委員長と情報交換をした際に、インテグリティ委員会の取り組みがスタートし実施されて3ヶ月経つ中での現状と課題点を共有することができました。このことについて、審判だけが取り組むのではなく、審判が取り締まるものでもなく、「クリーンバスケット」の実現に向けてコーチ、プレーヤー、審判、主催者（連盟・協会）が協力していくことの大切さやその理念の意味を深く理解することができました。バスケットの価値を高めることを目指して、観ている全ての人々がバスケットを不快な思いをすることなく、純粋に楽しんでもらえるよう、審判全体に共有していきたいです。

最後に派遣に際してご高配くださった鹿児島県協会の皆さま、暖かく迎えてくださり、様々な場面でお世話になった沖縄県バスケットボール協会の皆さまに感謝申し上げます。拙い内容ではありますが報告とさせていただきます。

本当にありがとうございました。